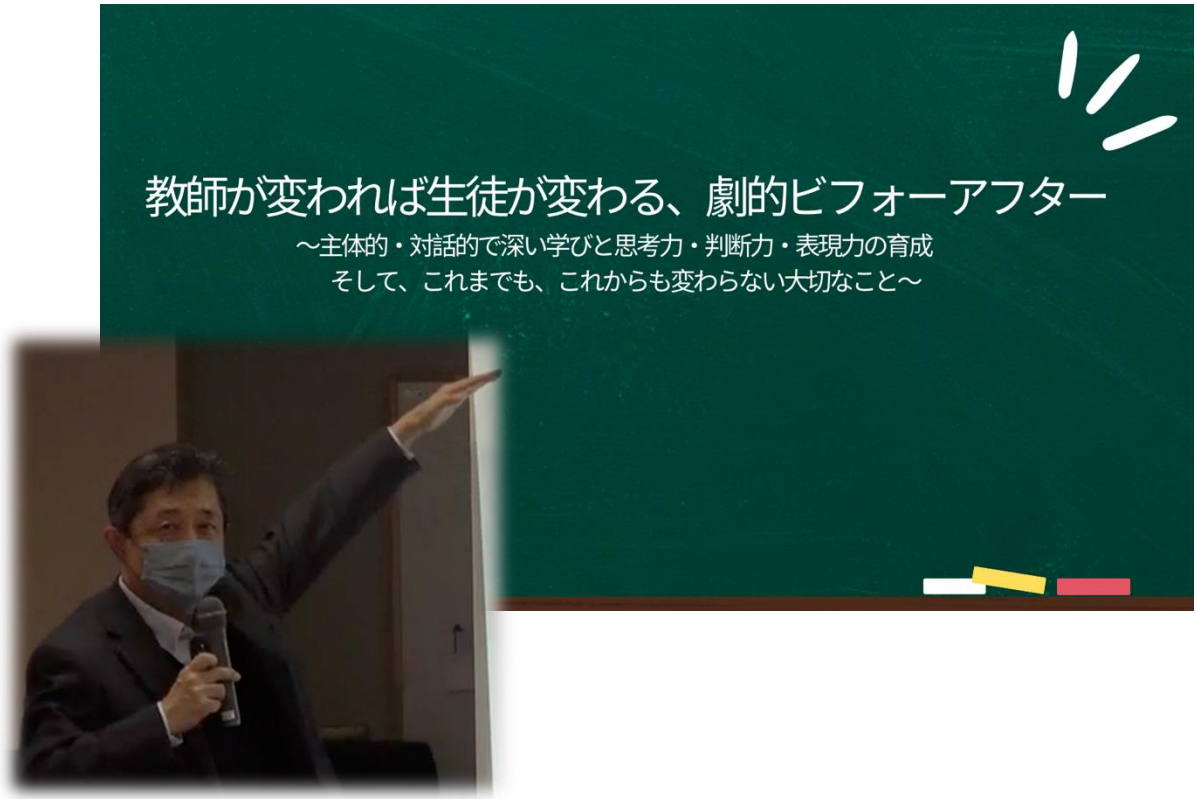
中嶋塾@東京 2023 12 月例会

特別講演：肥沼則明先生「教師が変われば生徒が変わる、劇的ビフォーアフター
～主体的・対話的で深い学びと思考力・判断力・表現力の育成
そして、これまでも、これからも変わらない大切なこと～

日　　時：令和５年12月17日（日）午前10時～12時

会　　場：東京都北区立飛鳥中学校



第１章　**「育てたい生徒像の実現に向けて」**

○○ ○○　　東京都○○区立○○中学校　　国語

第２章　**「リーディング・ショー　～生徒の力を引き出すために～」**

○○ ○○　　東京都○○区立○○中学校　　英語

第３章　**「What　Am　I　Show　～生徒の『即興力』と『関わり合う心』を育てる～」**

○○ ○○　　○○大学付属中学校高等学校　　英語

第４章　**「生徒の『思考力・判断力・表現力』を高めるための工夫」**

○○ ○○　　神奈川県○○市立○○高校　　英語

第５章　**「授業は『学級づくり』、学級づくりは『自分づくり』」**

○○ ○○　　愛知県○○市立○○中学校　　英語

第６章　**「教師が変われば生徒が変わる　～『正しい指導』と『生徒理解』～」**

○○ ○○　　埼玉県○○町立○○中学校　　英語

はじめに.

Its continuing mission: to explore strange new worlds.

私たちは、教師として、挑戦と学びの喜びを生徒と共有しようとしています。
未知なるものに出会うことで、私たちは新たな視点を得て、成長します。

受け取ったバトンの中には、肥沼先生の思いが詰まっています。
その思いが伝わる瞬間、エールが広がり、物語は新たな章へと進みます。

利他の心で堅固な縦糸が張られ、人間関係で豊かな横糸が通されていきます。
与え続けることで織り成される、温かな絆が私たちの教育実践を豊かにしてくれます。

少しでも、この小冊子を読まれた方のお役に立てれば、この上ない喜びです。

編集長　○○ ○○

１章　育てたい生徒像の実現に向けて

「生徒は、本当に授業で楽しく英語を学べているのだろうか」

４０歳を目前にして悩んでおられた肥沼先生。

その悩みは、私たち塾生が入塾前に抱いた悩みと同じでした。

しかし、私たちは、肥沼先生の２時間の講演から、「育てたい生徒像」とはどんなものであり、それを実現させる「日々の指導や活動」への多くのヒントを得ることができました。

「私たちは、一体、どんな生徒を育てようとしているのか？」

この命題に対して、筑波大学附属中学校の英語科では、３日間に渡る教科部会が開かれ、肥沼先生は同僚の方々ととことん議論されたそうです。そこから導き出された、英語科として目指す**「生徒像」**は次のようなものでした。

❶「『生きたことば』でコミュニケーションできる生徒」
❷「困難に対して臨機応変に、粘り強く取り組むことができる生徒」

これは約３０年近く経った今も、筑波大附属中の「共通理念」として受け継がれています。

❶「『生きたことば』でコミュニケーションできる生徒」

この「**生きたことば**」を使うとは、教科書を字面どおりに正しく読めればいいわけではなく、本当に伝えたいことは何かを互いに理解して伝え合うということです。つまり、それは、英語を流暢に話せることではなく、英語に互いの思いや考えを乗せて伝え合う生徒を育てるという意味です。そういう意味では、「音読」は「話すこと」の基礎を支えています。

「**生きたことば**を使うには、まずは音読指導から」

筑波大附属中では、年３回の「音読テスト」を年間計画の中に位置付けています。いずれも春・夏・冬の長期休業の後に実施されます（中１は春を除く年２回)。「リーディング・ショー」と名

付けられた音読テストは、１人５０秒の公開方式で、クラスメイトの前で順に繰り広げられるというものです。

従来、「音読」は「理解（読むこと）」と「表現（話すこと）」の両方の側面を持った活動です。学習指導要領では「読むこと」の領域で取り扱われますが、筑波大附属中では、後者に重点を置くことで、「生きたことば」を使う生徒の育成に力を注いでいます。本当に伝えたいことは何かを理解して使っているか、自分で考えて表現しているか、一人ひとりの力が発揮される場面が、５０秒の中に詰まっていました。

❷「困難に対して臨機応変に粘り強く取り組むことができる生徒」

粘り強さは、「困難」な状況に置かれて、初めて鍛えられると考えます。ただ、それは「負荷」をかけるのと同じで、やみくもに難しい課題を用意するのではなく、「面白そう。努力は必要だが、なんとかできそうだ」という見通しを与えることで可能になります。

筑波大附属中には、昭和63年から始まった「*What Am I Show*」という活動があります（活動については後述）。生徒一人ひとりが、全員の前で一定時間、MC となってクイズショーを進行するという「困難」な状況に置かれます。そこでは、単なるQ&Aの活動ではなく、即興のやり取りが必要となり、しかも「Show」なのですから、何よりも仲間を楽しませなければなりません。まさに、リアルタイムのコミュニケーション活動です。

蒔田先生の授業で見た *What Am I Show* では、生徒たちの育った姿に圧倒されました。どの生徒も本気で取り組んでいる、どの生徒も挙手をする指先までピンと伸びている、的確なreferential questionsになっている、等々、見たことのない世界でした。

しかし、今回、それは筑波大附属中学校の英語科が全体で取り組まれた結果だということ、しかも肥沼先生から、時代を追ってどう変遷してきたのかという映像を見せていただき、個人レベルではなく、チーム力こそが確かな学力を育てるのだと痛感しました。あえて、「困難」な状況を言語活動の中に取り入れることは、英語科の教師たちの「理念」の表れであり、生徒愛なのだということがよくわかりました。

次の章では、筑波大附属中で長年行われているリーディング・ショーという活動を紹介します。ここでも、やはり私たちがモデルとすべき「チーム力」が見られます。

文責（○○ ○○）

２章　リーディング・ショー　～生徒の力を引き出すために～

⑴ リーディング・ショーで生徒を鍛える

「**生きたことば**」の土台となるリーディング・ショーとは、一体、どのような活動なのでしょうか。
それは、次のようなものです。

・　音読練習の成果を発表するために、クラス全員の前で「音読」を発表する音読テスト。 ・ 一人 50 秒の設定で、合図のチャイムが鳴ったら次の人へと順番が移っていくというルール。 ・ 1996 年以降、毎年・全学年で実施されている活動。 ・ 実施時期は、長期休業の後。（１年生は夏・冬、２年生は春・夏・冬、３年生は春・夏・冬の計８回）

研修会場では、スクリーンにリーディング・ショーの様子が流されました。それは、英語教師なら、誰もが思わず目を見張るような映像でした。スクリーンに映し出されたのは、表情豊かに教科書本文を「**演読**」する生徒たちの姿。目線や表情を変えたり、間をとるのはもちろんのこと、登場人物によって声色を変えたり、ダイアログでは、落語家のように顔の向きを変えたりします。

（生徒発表画像）

生徒たちの表情は真剣そのもの。みな、登場人物になりきっていました。圧巻だったのは、最初の生徒です。教科書の英文をまるで映画の一場面のように見事に演じきっていました。演説中の決め台詞や最後の場面では、クラスから大きな拍手が巻き起こるなど、学級が一体となってこのリーディング・ショーを盛り上げている様子がうかがえました。仲間がどこをどのように読み取り、どんな「こだわり」を見せているかという思いをしっかりと受け止め、それを客観的に評価しようとしている様子が見られました。

このリーディング・ショーで扱っている教材は、教科書の本文だけではありません。生徒たちが毎朝聞いている『基礎英語』のテキストや、世界会議での有名な演説の原稿など、多岐に渡っています。彼らは、自分が「演読」に選んだ内容がどんな場面であり、登場人物がどんな心情であるかを何度も、何度も読み込んで考え、仲間はそれを自分ごとのように受け止めます。

表現力を鍛え、生きたことばでコミュニケーションできる生徒を育てるためには、教師側から与えるばかりでなく、生徒が自分で選び、聞き手に伝えるには、内容をどう理解したかという「読解力」こそが豊かな「表現力」を引き出すのだということがよくわかりました。

感嘆している私たちを脇目に、肥沼先生は話をさらに進めていかれました。

肥沼：「ではここからは、パフォーマンステストの評価について話を進めていきましょう。
次の生徒は、中学校３年生の夏休み明けのリーディング・ショーの様子です」

最初にスクリーンに映し出されたのは男子生徒です。発音そのものは特に問題はないようですが、彼の視線は教科書を向いており、うつむいて音読をしていました。次は女子生徒です。先ほどの生徒同様、英語らしい発音で音読できています。彼女も基本的には手に持った教科書を読みながら、時折仲間の方を向いて音読しようとしていました。

二人とも、数分前に見せていただいた、リーディング・ショーの生徒とは異なり、生徒自身が音読や表現を「工夫」し、「楽しむ」様子は見られませんでした。

肥沼：「さて、みなさんは５点満点でいくつの評価をつけますか？指で評価をしてください」

会場を見渡すと、男子生徒には２本から３本、女子生徒には３本から４本あげた塾生が多いようでした。

肥沼：「どうして評価がばらつくのでしょうか？」

一瞬、ドキッとしました。（たしかに。これまでも教師によって点数がばらついたりすることがあり、教師間で合意形成がなされないままテストが行われることがあったな…。）思わず、肥沼先生を見ていた視線を落としてしまいました。

肥沼先生はにっこりしておっしゃいました。「当たり前ですよね。最初に評価の観点を話し合っていなかったからです」

それから、先生はパフォーマンステストの評価について２つのポイント(①②)を示してくださいました。

＜評価活動で大切なこと＞

① 活動の前に、評価の「観点」「規準」「基準」を検討し、それを生徒にも示すこと → 項目・達成目標・カッティング・ポイントの明確化

② 事前に、採点者間の共通理解を図っておくこと → ①の説明責任の明確化

まず、大事なことは「何がどこまでできればいいか」という最後に到達した生徒の姿を教師間で共有しておくことです。そして、それを可能にする「**評価規準**」(criterion :到達目標の具体的モデル）と「評価基準」(standard：ABC といった評価の尺度とその根拠）を、事前に教科部会全体で話し合っておくことです。「**観点**（評価項目)」「**規準**（達成目標)」「**基準**（カッティング・ポイント)」を明確にしておくことで、評価者による差異が生じることなく、公正・公平に判断（評価）をすることができます。そして、それを生徒にあらかじめ示し、生徒ともゴールとそれに至るプロセス、さらにはどう評価されるかという視座について共通理解を図っておくことです。これによって生徒は安心して練習をすることができます。

肥沼：「ここまでは、誰もが聞いたことがあり、大事だということも認識されていると思います。ただ・・・」

そうおっしゃった後、肥沼先生は本当に大切な部分に迫っていかれました。

肥沼：「先ほどお見せした二人の生徒。あの二人の生徒がどのような生徒なのかを知っているのは『私』しかいません。私は、この時のリーディング・ショーの結果に非常に不満でした。ショックでした。もっとできる生徒たちなのに、これしかできないのか、と。あの二人の生徒の実力があんなものではないことを知っているのは、『私』だけなのです。これは、どういう意味かわかりますか」

（－間－　肥沼先生は全体をゆっくりと眺められ、そして・・・）

肥沼：「彼らが伸びない理由は『私』自身にありました。正しく読めればそれでよしとしていたのです」

しばらく、静寂の時間が流れました。

（そうだ、教師である自分が満足していては、生徒は伸びない）　どの塾生も同じことを考えていました。

３年生の夏休み明けということは、生徒たちにとってはすでに７回目のリーディング・ショーです。生徒たちだけではなく、肥沼先生自身にもマンネリがあり、指導に工夫を加えてこなかったことを反省しておられました。ご自身の指導不足に気づかれた肥沼先生は、その後、ある工夫をされます。

昨年度行った３年生の「リーディング・ショー（ベスト盤）」の映像を、生徒たちに見せられたのです。

⑵「先生にやらされる音読」から「自分でやりたくなる音読」へ

「もう一回（リーディング・ショーを）やらせてください。」

生徒たちから再チャレンジ要求の声が上がり、翌月に再度リーディング・ショーが行われることになりました。このあと、会場のスクリーンに映し出されたのは、先ほどの生徒たちが表情豊かに、そして自信たっぷりに表現を楽しんでいる姿でした。

（生徒発表画像）

肥沼先生は、塾生に次のように投げかけられました。

肥沼：「みなさん。果たして私たちは、最初にお見せした生徒の姿のまま評価してもよいのでしょうか？

それは『正しい評価』と言えるのでしょうか？」

自分の実践を振り返り、無言でいる塾生に向かい、肥沼先生は最後のポイント（③）を示されました。

③　発表前に、生徒がこだわりを持って「これ以上ないものにしたい」と思えるように仕掛けること 　＝ 指導と評価の一体化

肥沼：「パフォーマンス評価の際にもっと大切にすべきなのは、評価をする前に「生徒の力を最大限引き出す」指導を行うことです」

肥沼先生は、そう力強く言い切られました。その表情には、多くの生徒たちを変容させたという指導から生まれた自信がみなぎっていました。

音読テストの場合は、具体的に「生徒のモデル」を示すことを工夫されていました。生徒の映像（成果物）を毎年記録しておき、その一部を中間評価の時点で生徒に見せるのです。授業の「転」として、揺さぶりをかけるのです。すると、自分の取り組みに一定の満足度（いいものになったという自負心）を感じている生徒たちは、大いに刺激を受けて、「まだまだやることがある。もっと上を目指したい」という気持ちになります。

目指すべき姿を脳裏に思い描く（visualize）ことで、具体的に何をすればいいかがわかり、一気に気持ちが高まります。どこをどのように読めばより「語り部・声優・キャスター」になれるか、を本気になって考えるようになります。スイッチを押すのはいつも生徒の方です。教師が彼らのスイッチを押すことはできません。「自己決定」には、あくまでもタイミングが必要だということがよくわかります。評価には信頼性と妥当性が必要です。そのためには、導入時と終末の直前に「どんなモデル」を示すかが大事になります。それが「指導と評価の一体化」になるのだということがよくわかりました。

肥沼：「目の前の生徒の力を本当に知っているのは、授業をしている『私』しかいない」

その言葉の裏には、肥沼先生の「使命感」と「責任感」を読み取ることができました。教師の理念が確かであること、揺るがない生徒への愛があることと、生徒への期待度が高いこと（生徒を信じること）、それらがあって、初めて劇的改造 before ＆ after ができ、「教師年輪」となるのだと分かりました。

次の章では、蒔田 守先生（肥沼先生の元同僚）の１年生の授業で圧倒された *What Am I Show* の謎解きがされています。

文責（○○ ○○）

３章　*What Am I Show* ～生徒の「即興力」と「関わり合う心」を育てる ～

⑴「*What Am I Show*」とは何か

（テレビ講座画像）

まずは *What Am I Show* がどのようなものかを紹介します。

・１年生で必ず行う活動。
・答えがわかった後は、即興で関連する質問を考え続ける。
・「質問タイム（3 分）」と「解答タイム（１名）」があり、班ごとのポイントになる。
・活動時に演出＆３分タイマーとして BGM を用意する（生徒が選ぶ）。
・事前・事後指導（原稿・発表）がある。
・テレビの英語講座【NHK “A Step to English”（1972-1982）】を参考に開発された。

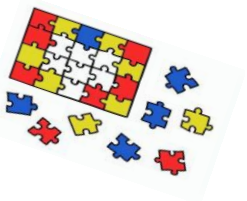
映像は非常に臨場感があり、まるでその場にいるかのように感じてしまいました。「筑波大附属中の生徒だからできる」のではなく、生徒たちの生き生きとした姿は、肥沼先生が baby step で丁寧に積み重ね、作り上げられた結果でした。事前に生徒一人ひとりと共に準備（指導）し、肥沼先生は側に立って、生徒の頑張りを**認めて**おられました。生徒はクラスメートの前で自分の自己責任（全員を楽しませること、途切れないようにすること）を果たそうと一生懸命になっていました。まるで、*What Am I Show* という一本の糸で全員がつながっているようでした。

（What Am I?
オープニング画像）

（What Am I?
活動開始画像）

（What Am I?
活動中画像）

オープニングは、ドラゴン・クエストです。QR で、臨場感を味わってみてください。そして、一人目の質問タイムの BGM はミッション・インポッシブルのテーマ曲でした。音楽だけで盛り上げているわけではありません。肥沼先生は、生徒の隣に立ち、臨機応変に質問者、発表者を褒めておられました。自然とクラス全体が温かい雰囲気になり、一人ひとりの「できた」という自己肯定感が高まります。「肯定的評価」は、仲間を受容する気持ちにつながり、そのうちに、たとえうまくいかなくても、「次こそ」という前向きな気持ちになれます。このように、「困難」をみんなで乗り越えていくような取り組みでは、グループ・ダイナミクスが生まれてきます。肥沼先生だけでなく、筑波大附属中の英語科の先生方は、授業を通して「学級づくり」をされていることがよく分かりました。さらに、一連の指導のプロセスを拝見していると、この *What Am I Show* の活動は、３年後のゴールから逆算されたジグソーパズルのワン・ピースであることが見えてきます。



What Am I Show の事前指導は計４時間。次のような流れになります。

１時間目　*What Am I Show* の説明

□ 活動のねらい

① 実際に英語を使う活動を通して習った英語を身につける。

② 出題者として、級友の前で自分の英語を堂々と発表でき、質問に適切に答えられるようになる。

③ 解答者として、積極的に活動に参加し、出題者や他の人の質問や答えをよく聞き、英語で質問できるようになる。

□ ゲームの概要

6～7 人のグループ対抗、班員が質問したり、正解すると得点

□ ゲームの進め方

① Questions & Answers Time １つのヒントに対して１分間ずつ質問と応答

② Answering Time 解答者は“Are you ～?”で答えを当てる 制限時間は 30 秒

③ 出題者と記録者が交代

□ 得点のつけ方

① グループの誰かが質問するたびに得点になる。

② Answering Time で正解を当てると得点になる。

③ 得点は英語係が記録する。

□ ゲーム実施上の注意

問題の作成と練習

① 問題作成者は別紙のカードに問題を書く。

（目標、タイトル、ヒント、予想される質問と答え）

② ２人そろって遅くとも実施２日前までに肥沼先生に問題を見せる。

２時間目　クイズの作成

□ 作成の基本と作成例 - ヒントは３つとする。

① カテゴリー　I am a country.

② 大まかに答えを絞れるもの　England is my mother country.

③ 全員が答えを絞れるもの　I have koalas and kangaroos.

□ ヒント文作成のポイント

① 習った範囲の英語で説明し、詰まったら主語や動詞を変えて発想の転換を図る。

② 友人の顔を思い浮かべ「この言い方は面白いぞ」と楽しみながら作る。

③ 一度作文してよしとせず、何度も書き直してよりよい文にする。

３時間目　ゲームの楽しみ方①（Q&A 表現練習）

□ 質問と答えのポイント

① 応答時は、質問をしっかり理解して答える。質問が理解できなければ聞き返す。
② あらかじめ質問を予想し、その返事を考えておく。

□ 質問と答えの実際例
「所有」「形」「大小」「色」などの尋ね方を知る。
□ 会話をスムーズにするための表現を学ぶ。
I have a question. / Pardon? / Let me see. / Any questions? など

<u>４時間目　ゲームの楽しみ方②（Q&A 作成練習）</u>
□ 質問者として質問を考える。
① 答えが全く分からない時の質問を考える。
第１ヒント： I am a person. に対して何を尋ねるかを考える。
② 答えが予想できた時、確認するための質問を考える（答えはオバマ大統領）
I am a person. → オバマ大統領 かどうか確認するために尋ねる。

□ 出題者として質問の答えを考える。
上記の①②の質問に対して、それぞれどう答えるかを考える。

帯活動に対して、ここまで細部にわたってこだわりを持って指導しておられることに心底驚きました。きっと、多くの英語教師は、３つのヒントを作成させるだけで指導を終えてしまうでしょう。

しかし、肥沼先生は「ヒントに対しての質問の仕方」「予想される質問とその答え」「答えがわかったあとの質問」「困った時の表現集」など、先の先まで見通し、生徒が混乱しないように、そして自分たちの力で乗り越えていけるように、ルールづくりや足場かけ（問題解決の手立て）を用意してから、本番に臨ませておられました。

このような緻密で、つながりのある細分化された指導があるからこそ、関連する質問が自由自在に作れる生徒、即興のやり取りを楽しむ生徒を育てられるのだと分かりました。

⑵ 何ごとも経験として次につなげる

What Am I Show は盛り上がって「終わり」ではなく、以下のように「丁寧な振り返り」が最後に用意されていました。

① 活動（クイズ作成とクイズ実行）それぞれの自己評価（ABCD）を行う ② 活動の感想を書く ③ 実際に出た質問と答えを書き、訂正や改善案を考える

このように綿密に組み立てられた指導を経て、生徒たちは堂々と本番を迎えていました。この

活動の「**事前指導**」と「**振り返り**」には、筑波大附属中の英語科が目指している「**困難**に対して臨機応変に、粘り強く取り組む生徒」を育てるための手立てや、活動を成功に導くための原理原則が随所に表れていました。

たとえば、次のようなことです。

□ ２人１組のペアで活動する（協働学習）
□ 問題作成時に、目標を立てる（メタ認知能力）
□ 友人の顔を思い浮かべ、楽しみながら作る（相手意識、遊び心）
□ 何度も書き直してよりよい文を作ろうと努力する（こだわり）
□ 教師は、質問の作り方について細かく指示する（学習者ファースト）
□ 活動の自己評価、感想の記入（気づき）

「**生徒は自分で気づいたことからしか学ばない**」--- これは中嶋先生が教えてくださったことです。上の枠でまとめた指導から、この「学習者が主体となって気づく学習」が展開されていることがわかります。教師が答えや考え方を押し付けるのではなく、生徒が自ら考え、気づけるような授業の流れを考えること、教師がファシリテーターとして機能することの重要性を再確認しました。

次の章では、新しい学習指導要領の肝となっている３観点のうち、現場の先生方が困難を感じておられる指導、生徒の「**思考力・判断力・表現力**」を高めるための工夫について述べます。

文責（○○ ○○）

４章　生徒の「思考力・判断力・表現力」を高めるための工夫

⑴「知識･技能」⇨「思考力･判断力･表現力」⇦「主体的に学習に取り組む態度」

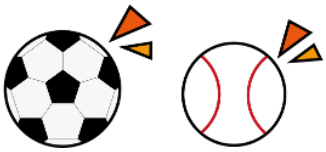
生徒の「**思考力・判断力・表現力**」を高めるためには、どのような工夫が必要でしょうか。リーディング・ショーでも *What Am I Show* でも共通していることがあります。それは、課題に対する自分の考えを持ち、試行錯誤しながら、よりその質を高められるように自分なりに工夫し、相手と高次の表現内容を共有しあうことです。生徒たちは、教材やその内容を正確に理解するだけでなく、主体的にオリジナリティの生まれる言語活動に関わっていました。

このように、自分で工夫する場面があるからこそ、「学ぶ意欲」が高まり、仲間から学ぶからこそ「興味・関心」が広がっていき、振り返る時間があるからこそ、自身のメタ認知が深まります。安易にセミナーや書籍で知った活動を時期や生徒の関心も考慮せずにクラスに持ち込むのではなく、日々の授業の中に上のような場面をつくり出すことでこそ、生徒の「思考力・判断力・表現力」を高めることができると考えました。

⑵ 授業を構成する上で考慮すべきことや留意点とは？

肥沼先生は、授業デザインを高めるために必要なこととして、次の資料を示されました。

ア）　確かな知識・技能を育成する活動を設定すること。
イ）　思考し、判断し、表現する機会を多く設定すること。
ウ）　英語を実際に使う場面をできるだけ多く設定すること。



視聴した「more ～の導入」の授業では、そのような活動が意図的に設定されていました。例えばサッカーボールやバスケットボールのシルエットだけを見せ、生徒から bigger や smaller を何度も引き出しておられました。生徒たちは「あっちのボールの方が大きいからサッカーボールだ」と思考し、「もっと大きいは bigger って言うはず」と、適切な表現形式を踏まえ、実際に口に出して表現していました。

また、肥沼先生は、生徒が視覚的にわかりやすいようにと、イラストが書かれた丸い紙を２つ（バスケットボールとバレーボール）用意され、それらをホワイトボードに貼り、不等号を書いて説明されました。

肥沼先生は、常に生徒の反応（理解度）を確認されていました。生徒から英語を実際に使う場面を奪わないようにし、生徒自身が自分で答えに気づけるようにされていました。

そして、私たちが授業動画の視聴を終了した後、「思考力・判断力・表現力」を育成するためのポイントについて説明されました。

① 新しい表現を学ぶ明確な目的・場面・状況を設けること
② 振り返りをしながら新しい学習を行う場面を設けること
③ 身近な話題から一般化させることで興味・関心を維持すること
④ やりとりで気づかせる帰納的な指導過程を考えること

教師が教え込む授業ではなく、生徒に新しい学習事項を**想起させ、自ら気づく・考える機会を与える**授業になっていました。生徒が「**気づく**」ということは、受け身ではなく、授業に「**参画している**」ことが前提となります。そのためには、生徒と自然なインタラクションをしながら、生徒が「なんだろう？」「なぜだろう？」と疑問に思い、ハッと自分で気づけるように演出をしなければなりません。

そこで、サッカー部のある生徒に話題を振られました。

Which is more popular in Japan, soccer, or baseball?

教師が一方的に説明するのではなく、このようにクラスを巻き込みながら授業を進めていかれました。生徒の関心を捉える、または指導する内容に関係がある生徒に話を振って場面作りのきっかけを作り、さらに同じ質問を全体にして場面を共有されていました。こうして、繰り返し使われた比較級の文が、自然にクラスの生徒から出てくるようになっていました。

教師が「教えたいこと」や「やりたいこと」を順に生徒たちに教えているだけでは、生徒は「生きたことば」を使えるようにはなりません。言葉の習得はスパイラルに行われるものです。

肥沼先生の授業では、オーラル・イントロダクションで、生徒に100%の理解を求めることもなく、教師が一方的に説明するということもありませんでした。生徒に英語で質問をし、生徒自身で考え、その答えを引き出しながら段階的に理解させておられました。生徒にとって自分ごととして捉えられる課題を与えることで、生徒は「誰に向けて、何のために、何を、どのように伝えればいいか」を考えるようになるということです。これが「思考・判断・表現」を鍛える指導になります。では、次の章では、肥沼先生の真骨頂である「**学級づくり**」について紐解いていきます。

文責（○○ ○○）

５章　授業は「学級づくり」、学級づくりは「自分づくり」

⑴「終礼」から読み解く肥沼先生の理念

肥沼先生の授業では、教師による一方的な説明ではなく、やり取りを通して気づかせる帰納的な指導が行われていました。そして生徒たちの表情や態度から、生徒たちが仲間や教師とのコミュニケーションを心から楽しんでいることが伝わってきました。

どうしたら、肥沼先生がご指導されていた生徒たちのように、コミュニケーションを心から楽しむ生徒は育つのでしょうか。

肥沼先生が大事にされていた「終礼」の時間にそのヒントがありました。「終礼」とは、「帰りの会」とか「帰りの学活」などとも言われる学級の時間です。

＜肥沼学級の終礼の流れ＞

学級週番３名が司会となって前に立ちます。内容は大きく分けて次の４つです。

① 授業連絡

② その他の連絡

③ ボランティアの生徒によるその日の反省

④ 教師と生徒のやり取り

動画を拝見したところ、③の場面の雰囲気の良さに感嘆しました。生徒たちは発言者の方に顔を向け、満面の笑顔で楽しそうな声を漏らしながら話を聞いていたのです。研究授業後の終礼でしたので、たくさんの大人が見ている前です。自然体で過ごす生徒たちの様子に驚かされました。その様子を拝見していて、「終礼」の時間が、普段から生徒にとって仲間とのコミュニケーションを楽しむ時間になっていることが分かりました。

⑵ 教師の介入を減らし、「気づき・考え・行動する」機会を作り、生徒に委ねること

肥沼先生は、できるだけ話さないようにしておられました。必要がある時だけ、司会の生徒に耳打ちをされていたのです。この場面を通して、授業だけでなく、学校生活全般において「生徒の力（ポテンシャル）」を信じて任せておられることがわかりました。

肥沼先生から気づきを与えていただいた後、次のスライドを共有していただきました。

これまでも、これからも変わらない大切なこと

（１）生徒が思考・判断・表現するための条件

① 生徒の心が解放されていること

・母語で表現できない生徒は、英語でも表現することはできない。

※外国語は母語より「情意フィルター」（affective filter）が高い。

② 母語で積極的に発言する生徒になっていること

・日頃の学校生活全てで「思考・判断・表現」の機会を与える。

これまでも、これからも変わらない大切なこと

（2）（1）の生徒を育てる方法

①英語以前に日本語でできるだけ多く表現させる。

②生徒同士の良好な人間関係を作る。

③教師と生徒の間の信頼関係を作る。

まさに、中嶋先生がいつも言われている「授業は学級づくり」という言葉の真の意味を理解した瞬間でした。肥沼先生のお話を伺って、学級づくりは「関係づくり」だと思いました。母語で何でも話せる雰囲気、そして仲間との関係性を作ることが授業以前に大切なことだったのです。

そこで肥沼先生の実践をより深く学ぶために、ホームページ（次世代を担う先生方のための英語学習指導）を拝見しました。(QR 参照)

ここからは、ホームページを拝見して見つけた、関係づくり（学級づくり）を進めていくための教師の姿勢について２点に分けて述べさせていただきます。

１点目は、徹底的に事前準備を行う姿勢です。肥沼先生は事前準備として、問いかけに対する生徒の予想される反応と、その回答を想定しておられました。

２点目は、徹底的に振り返りを行う姿勢です。肥沼先生は「**終礼**」を点の活動ではなく線の取り組みにするために、やり取りの内容を記録し、振り返りの機会を設けられていました。驚いたことは、生徒の発言だけでなく、その発言の裏にある生徒の気持ちにまで思いを馳せられて記録されていたことです。**終礼**の準備から振り返りまでの一連の流れは、さながら小学校の研究授業後の協議会で配られる「授業記録」（教師の発問や指示、子どもの答えを全て録音から文字起こしされたもの）のようでした。（肥沼先生は、ご自分の指導の全てを漏らさずに記録され、それを冊子にまとめておられます。研究授業のやり取りも全て記録され、指導の改善につなげられておられました。）

「**終礼**」の事前準備と振り返りの話を知り、「学級づくり」ができるかどうかは、まさに「教師の姿勢次第」だと思いました。つまり、教師が継続して「凡事徹底」できるかどうかです。しかし、それは肥沼先生が、「学級での生徒のやり取り」や「授業でのやり取り」の中に「本当に価値のある教育」ができることを理解されていたからこそできたことです。

それを教師が身につけるべき「原理原則」とするなら、次のようになるのではないでしょうか。

私たちが身につけるべき教師の姿勢

「**生徒の育った理想の姿**」を追究し、「日々の凡事をコツコツと非凡にやり続ける」姿勢

文責（〇〇 〇〇）

６章　教師が変われば生徒が変わる　～「正しい指導」と「生徒理解」～

「育てたい姿」を明確にし、どの生徒も自信がもてるようになるまで（できるようになるまで）指導をし続けることが**「私たちが目指すべき正しい指導」**です。「わかった」で終わる授業ではなく、「自分の力でできた！」と学習者が笑顔になる授業こそが生徒の自己肯定感を高めます。それが、教師への信頼へと繋がっていくと考えます。

肥沼先生がされていたのは「正しい指導」だけではありませんでした。視聴したビデオに出てくる生徒の情報を瞬時に口に出されていました。生徒との思い出、具体的なエピソードがパッと取り出せるということは、一人ひとりの生徒のことをよく観察し、よく理解したうえで、実際に力をつけておられたということが読み取れます。

生徒が間違いを恐れず、堂々と発表できるのも、生徒同士がお互いに学び合える、支え合える雰囲気づくりをされたからです。

今回の肥沼先生の講演を通して、教師と生徒との人間関係だけでなく、生徒同士の関係づくりも強固にしながら、授業を通して学級づくりをすることが大切なのだと気づかされました。

肥沼先生は生徒との接し方を工夫されていました。以前は、先走ることが多く、十分に生徒に寄り添うことができていなかったとおっしゃっていました。しかし、以前の考え方を改め、たとえ幼稚な内容、教師があまり関心がないことであっても、正対して耳を傾けて聞いてあげることで、生徒は自分が大事にされていると感じるようになったと語られていました。それが学級全体に伝わり、やがて生徒同士もお互いを受け入れるようになったというお話をされました。その姿はまさに**「教師が変われば、生徒が変わる」**という言葉そのものでした。

教師が生徒に対して開放的な態度で接し、一人ひとりの良さを認め、期待することで、生徒は「頑張ろう」と思うようになります。

肥沼先生は、生徒の成長のために常に**「自己更新」**をしようと心がけておられました。講演のタイトルである「教師が変わる」というのは、「教師自身が常に学び続ける」という意味です。たとえば、肥沼先生は *What Am I Show* について、自分の指導に決して満足されず、同僚や生徒の声に耳を傾け、活動内容をどんどん見直していかれました。

また、生徒の活動の様子やその成果を資料や映像に記録し、振り返りの際に活用されていました。生徒にとって、授業の**「振り返り」**が大事であるように、教師にとっても授業内容や研修での学びを「振り返る」ことが大事です。授業は打ち上げ花火ではありません。「やりっぱなし」では、いつまで経っても教師年輪はできていきません。地に足がついた取り組みこそが「自己更新」につながり、生徒に力をつける指導へとつながっていくのだと痛感させられました。

文責（〇〇 〇〇）

あとがきに代えて

人生のどこかで、あるいは何度も「救われた」「変われた」「勇気をもらえた」という経験があるはずだ。誰の人生にもやってくる、自分１人の力ではどうすることもできない悩みや苦しみ、不安や葛藤。それすらも糧として、前に進もうとする力に変えてくれるような講演会だった。

講演会中、塾生の誰もが胸の高まりを覚えた。まだまだ、自分にはやらなければならないこと、やれることがある、そう思い知った。

忘れてはならないのは、私たちは英語という「窓」を通して「生徒という名の人間」を育てているということだ。肥沼先生からバトンを受け取った今、私の心は、同僚に繋げたいという思いで溢れている。

今回の研修を通して、自分自身を根底から見つめ直すことができた。
このような学びと、いただいたご縁に心から感謝したい。